

理想の参照文法書に向けて*

渡 辺 己

Towards Ideal Reference Grammars

WATANABE, Honoré

Keywords: reference grammar, grammar writing

キーワード: 参照文法書, 文法記述

1. はじめに
2. 参照文法書について
3. おわりに

1. はじめに

記述言語学の仕事とは、一言語について「文法・辞書・テキスト」を書くことである。この3つを整えることを唱えた「アメリカ人類学の父」フランツ・ボアズ (Franz Boas, 1858-1942) にちなみ、今でも「ボアズの3点セット」と呼ばれる。この中でも文法を書くことについて、R. M. W. Dixon, そして Nicholas Evans と Alan Dench は次のように言っている。

“If every person who called themselves a linguist settled down to provide a full description of a single previously undescribed language, then he or she would justify the title. This is not an easy task. It invariably demands extended field work, often in difficult circumstances; but it is—as I and others have found—the most satisfying and rewarding of tasks.” (Dixon 1994: 229-230)

“The writing of a descriptive grammar is a major intellectual and creative challenge, often taking

渡辺己. 2022. 「理想の参照文法書に向けて」. 渡辺己・澤田英夫(編)『参照文法書研究』.(アジア・アフリカ言語文化研究別冊 02.) pp. 7-20. DOI: <https://doi.org/10.15026/116956>



This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

* 本稿は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) で 2016 年度から 2 年間にわたり実施された共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」(以下、本稿では「本共同研究課題」と呼ぶ) の成果の一部であり、筆者・渡辺己による同課題第 1 回研究会における趣旨説明をもとに加筆修正したものである。本稿の初稿に有益なコメントをくださった山越康裕氏と澤田英夫氏に感謝の意を表したい。本稿の不備や間違いはもちろん筆者ひとりに帰すものである。本稿にあげたスライアモン語の例は筆者の現地調査によるものであり、この言語を教えてくださいました話者の方々に感謝したい。My deepest gratitude goes to the late Mrs. Mary George, the late Mrs. Agnes McGee, the late Mr. and Mrs. Dave Dominick, the late Mrs. Marion Harry, and Mrs. Elsie Paul. 筆者の現地調査は日本学術振興会科学研究費 (課題番号 19H01253 および 19K21627) の助成を受けた。

decades to complete. It calls on the grammarian to balance a respect for the distinctive genius of the language with an awareness of how other languages work, to combine rigour with readability, to depict elegant structural regularities while respecting a corpus of real and sometimes messy material, and to represent the native speaker's competence while recognising the patterns of variation inherent in any speech community.” (Evans and Dench 2006: 1)

文法書をいかにまとめるか、あるいは未記述の言語をいかに調査して捉えるかということは、長年、考察の対象となってきたが、この10年から15年ほどの間に、文法書をまとめるということ自体が論考の対象となった。例えば、書籍やまとまった論集に Aikhenvald (2015)¹, Nakayama and Rice (2014), *Studies in Language* 誌での2006年 (Vol. 30, Issue 2) の特集, Ameka et al. (2006) などあげられる。単独の論文でもエヴァンズ (2009) や下地 (2021) などがある。

現在は、しっかりとした査読を経た大部な記述文法書が多く刊行されている。主だったシリーズとしては、De Gruyter Mouton の Mouton Grammar Library (2021年春現在、刊行数は90を超える)、Language Science Press の Comprehensive Grammar Library (2021年以前は *Studies in Diversity Linguistics* というシリーズ名だった) などがあり、シリーズではなくとも大部な文法書が多く出版されている。日本では、AA研の企画を受け、くろしお出版から「シリーズ記述文法」が2018年より刊行され始めた。2021年現在、下地理則氏の『南琉球宮古語伊良部島方言』(シリーズ第1巻, 下地 2018) と、山田敦士氏の『パラウク・ワ語』(シリーズ第2巻, 山田 2020) が刊行されている。本共同研究課題参加者6名が同シリーズの編集委員として関わっている。

参照文法書そのものに対する評価も言語系の学会で高まってきている。Association for Linguistic Typology (言語類型論学会) では、参照文法書に与えられる賞がふたつ設けてある。Pāṇini Award (パーニニ賞) と Georg von der Gabelentz Award (ゲオルク・フォン・デア・ガーベレンツ賞) である。(前者は刊行されていない学位論文のもの、後者は刊行されている書籍に対して送られる。)

しかしその一方で、参照文法書が刊行されている言語は、正確に把握するのはむづかしいものの、世界の6000以上の言語のうち、まだまだごく少数にとどまっていることは間違いないであろう。

2. 参照文法書について

参照文法書 (reference grammar) とは、一言語の全体を網羅的に記述した文法書であり、語学用の文法書が規範的であるのとは異なる。記述文法書 (descriptive grammar) とも呼ばれる。本課題ではこれらを同義として使った。

それでは、理想の参照文法書はどのような要件を満たしているべきであろうか。これは簡単な問題ではないことは明らかである。それが分かれば、どの研究者もそのガイドラインに沿って文法を記述していけば良いはずである。ところが、言語は多種多様であり、あるタイプの言語に適した記述方法が他の言語の記述に適したものとは到底言えないことは改めて言うまでもない。さらに、一言語内では、ひとつひとつの部分が互に関連し、連動し、支え合う。その一部分の記述は、その言語の他の部分の記述に影響する。

さらに言語は、構造主義的に考えられてきたほどに静的なものではなく、共時態とは言っても、

¹ 同書の書評に林 (2016) がある。

常に変化の兆しをそこかしこにはらみ、あるいはかつての姿を部分的に引きずっている。言語とは、いわば捉えどころのない巨大なシステムであると言える。それを捉えようとする文法書には自ずと限界がある。しかし、理想の参照文法書に求めるべき共通した点がいくつかある。以下本稿では、まず §2.1 正確性 (accuracy) ・信頼性 (reliability), §2.2 網羅性 (comprehensiveness), §2.3 利便性 (accessibility), §2.4 可読性 (readability) に分けて考察し、そのあとに、§ 2.5 術語, §2.6 例, § 2.7 説明・分析の正当性・根拠, § 2.8 類型論・通言語的観点について考える。便宜的にこのように分けたが、かなり重なり合う部分がある。そしてこれらは時に矛盾する要求であるが、参照文法書はできる限りそれに応えるものでなければならない。

2.1. 正確性 (accuracy) ・信頼性 (reliability)

改めて言うまでもないが、参照文法書にはその言語に関する正確な情報が必須である。文法書のもととなる対象言語のデータの正確性、さらに分析の正確性が求められる。正確でなければ信頼できる参照文法書にならない。特に、研究が進んでいない少数言語や危機言語の場合、その参照文法書の記述が後世に残る唯一のものとなる可能性も高い。北アメリカの先住民諸語に関して言えば、録音機器もない 100 年以上も前に現地調査した E. サピア (Edward Sapir, 1884-1939) や J. P. ハリントン (John Peabody Harrington, 1884-1961) の記録が今でも価値を失わず、利用され続けているのは、ひとえにその音声学の記録の細かさと正確さによるものである。

逆の例として、筆者が調査しているスライアモン語²の先行研究があげられる。Hagège (1981) は 180 ページ程の短い著作であるが、同言語の全体を扱った参照文法書である。しかし、残念なことに軟口蓋の /xʷ/ と後部軟口蓋 (口蓋垂) の /χʷ/ (IPA では χʷ) の対立を認めておらず、一音素にまとめてしまっている。同書より前に公刊された論文 (例えば、Davis 1970) でも、現筆者のものを含む後続した論考でも、この 2 音は音韻的に対立する別の音素としている。さらに、同書は母音について、/a, e, e, o, ə/ とこれらに対応する長母音 /a:, e:, e:, o:/ を音素として立てている。後続する研究では母音音素は /a, e, o, ə/ (ただし、記号としては /a, i, u, ə/ を使っている) のみが立てられており、長母音は認めていない。確かに音声的に複雑なことで知られているセイリッシュ語族の言語なので、間違いも起こる。しかし、音韻分析でこれほどの間違いがあると、それを基にした文法の記述がいかに混沌としたものになったかは容易に想像できるであろう。(同書に関するこれらの批判については、Kroeber 1989 の書評に詳しく書かれている。)

もちろん、著者がどれほど慎重であろうと、音声の聞き取りであれ、音韻や文法の分析であれ、意図せず間違いを起こすことはある。しかし、防ぎうる間違いや言語データの偏りは批判されるべきである。

さらに注意すべきなのは、著者が自分の主張や理論的枠組みに都合の良いデータを強引に話者に言わせたり、最悪の場合では言語データを著者が作ってしまうことである。すなわち、データの捏造である。この問題については、例えば Mithun (2014) が論じている。Thomason (1994) は、アメリカ言語学会の機関紙 *Language* の編集長の時、間違っただけを使った先行研究からそのデータを検証なしに孫引きしている場合が驚くほど多いと報告をしている。このような問題を防ぐために、データ自体も公開し検証可能にすべきであるとの議論には、例えば Berez-Kroeker

² スライアモン語はカナダで話される先住民諸語のひとつ。系統的にはセイリッシュ語族に属する。同言語をなんと呼ぶかは問題があり、かつてはコモックス語本土方言 (Mainland Comox) と呼ばれていた。最近ではスライアモン語の *ʔayʔajúθəm* という呼び方も使われるようになったが、この語も問題がないわけではない。本稿ではスライアモン語と呼ぶ。詳しくは Watanabe (2003: 2-3) を参照されたい。

et al. (2018) がある。(この点については §2.6 でも触れる。)

2.2. 網羅性 (comprehensiveness)

参照文法書は、対象言語のあらゆる側面をすべて網羅的に記述しているべきである。ただしこれは理想であるものの、実際、一言語は巨大であり、複雑に入り組んだ、しかし精緻な体系をなし、さらに体系からの逸脱も多く、その全体像をすべて捉えるのは時に絶望的になる。一言語全体の記述に真剣に取り組んだことのある研究者ならば、その対象を前に立ちすくんだことがあるはずだ。

確かに、一言語全体に現れる構造・現象をすべてカバーするのはむづかしい。しかし、参照文法書では、その骨格は網羅的に捉えたいところである。ここで骨格と呼ぶのは、現れる音素および音素の配列、語や文の構造、語形成に現れる形態素などである。これらはもれなく記述されていることが求められる。例えば、動詞が主語と目的語の人称・数で活用するのであれば、その組み合わせをすべて載せたパラダイムに穴があってはいけない。

参照文法書が著者に要求することは多い。いくら音韻論が得意だったり専門であったりしても、参照文法書を書くとなれば、音韻論だけを詳しく書くわけにはいかない。形態論も統語論も書かねばならないし、さらにもっと大きな談話単位のことでも書かねばならない。

2.3. 利便性 (accessibility)

参照文法書は分かりやすく、参照しやすい、使いやすいものとなっているべきである。知りたい情報へのアクセスが容易であるという利便性も重要である。平明な文章で説明が書かれていることが利便性の大前提だということは言うまでもない。説明文を読んでも、読み手が意味を理解できない、あるいは意味を理解するのに苦労するようではいけない。それでは誤解が生じる可能性ができてしまう。参照文法書に限った話ではなく、言語学の研究論文・書籍は、文学ではないのであるから、その説明の内容だけが読者の頭に入っていかななくてははいけない。文体に凝るようなことはするべきではない。電化製品の取扱説明書を書くくらい的心構えが良いと思われる。これは逆に言うと、言語学の研究論文・書籍を書くために文才はいらないということであり、訓練によって身につけられる技術で十分であるということでもある。

さて、本文の読みやすさの他に、外形的な点で、参照文法書の利便性を増すものがいくつかあげられる。まず重要なものとしてあげられるのは目次である。目次に連動しているのは、章やセクションの立て方である。セクションの中には、サブセクション、さらにその中にサブサブセクションを立てるものも多い。そうすることによって、参照文法書全体のどの部分に何を書いているかが明確になる。下位セクションをどれくらい深く作るかは、何が利便性を増すか考慮しなくてはならない。§1.2.3.4 くらいまでは視認性が良いが、§1.2.3.4.5.6 くらいになると、読みにくさの方が増してくる。もちろんデジタル版であれば、その下位セクションにリンクを張り、クリックするとそこに飛ぶようにできるので、視認性の問題は軽減するかもしれない。

目次にどの階層まで出すべきかというのも思案のしどころであり、参照文法書の著者によって異なる。すべての下位セクションを目次に表示しているものもあれば、例えば、実際には §1.2.3.4 などの階層までであるが目次には §1.2, §1.3 というレベルまでしか表示しないものもある。

目次の他に利便性を上げるものに、索引がある。適切に作られた索引は、その文法書で調べたいことにすぐに行き着けるようになるので、読み手の助けになる。

もうひとつあげるとすると、例番号がある。論文で例に番号を付さないことは考えにくい

参照文法書の場合、大部になるため、すべての例に先頭から番号を振っていくと数百、数千という番号になってしまい、これも視認性は悪い。そこで、章ごとに番号を振り直したり、セクションごとにそれをしたり、文法書によってさまざまである。例えば、Suttles (2004) はセイリッシュ語族ハルコメレム語（マスクイアム方言）の参照文法書であるが、例が非常に多く、すべてのものには番号が振られていない。説明に必要な場合だけ、セクションごとに (a), (b), (c)... と番号ではなくアルファベットが付されている。

2.4. 可読性 (readability)

研究とは、これまで分からなかったことを解明することだと考えられがちであるが、それは研究のいわば半分であり、もう半分はその成果を伝えることである。すなわち、どれほどの新発見があろうと、それが発見者本人以外に伝わらなかつたら、研究の意味がない。参照文法書も同じく、著者以外のひとが読んで分かるものでなければ意味がない。特に参照文法書の場合は、当該言語の専門家以外にも、そして当該言語が属する語族・地域の専門家以外のひとにも分かるように書くのが重要である。

参照文法書の利用者や利用の目的によって異なるが、一冊の文法書となっているからには、最初から順を追って読み進めることを想定したものであってほしい。大まかに言えば、その章立ては「当該言語の概要、音声・音韻論、形態論、統語論」と進むのが一般的である。このあとに、「情報構造、談話」などが入ることもあろうし、最後に付録として「テキスト、語彙集」などが付いていることもある。

一冊の文法書を最初から読み進め理解できるものにするということは、ある箇所は、そこまで読んできた箇所の知識だけで理解できるように、説明を積み上げていくということである。読んでいる箇所よりも後ろに説明されることを知らなくては分からないというのは、極力避けなくては行けない。ここで「極力」と言うのは、一言語はすべての部分がそれぞれお互いに連動しているために、時には説明する順序が思うようにはいかないこともあるからだ。一言語の内部はそれぞれ連動し、互いに支え合って、ひとつの体系をなしている。それを平面の文法書で表すのは容易ではない。そこで、さまざまな部分に関係しあっていることを示すために、相互参照 (cross-reference) を活用するのが良い。

通読を想定しない構成の極端な例が、Newman (2000) である。同書は、750 ページを超える大部で詳しい、そして信頼できるハウサ語の文法書である。しかし、同書の副題 “*An encyclopedic reference grammar*” が語るように、百科事典的な構成で、最初から通読できるものではない。若干、具体的に述べると、同書は 80 章からなり、それぞれの章であるトピックについて詳述している。ところがその章立ては、そのトピックのアルファベット順に、1. Abstract Nouns (Derived) から、80. Writing Systems: Orthography まで並んでいる。そのため、例えば 54. Phonology は、53. Numerals and Other Quantifiers に続き、そのあとには 55. Pluractional Verbs, 56. Plurals, 57. Prepositions, 58. Pro-Verb yi, 59. Pronouns が並ぶ。第 54 章の音韻論と深い関係にある超分節音素は、71. Tone and Intonation にある。ちなみに、その直前は 70. Tense/Aspect/Mood (TAM)、直後は 72. Topicalization である。ハウサ語の専門家が知りたいことを調べるためには便利なのかもしれないが、専門外の者が同書を読んでこの言語の全体像を掴むのは大変である。

2.5. 術語

文法記述をする際には「術語」を使うことになる。術語はすなわち言語学における専門用語であり、ひとつの専門用語は、ひとつの意味、ひとつの機能、あるいはひとつの構文のみ限定的に指すべきものである。すなわち、形式（シニフィアン）と内容（シニフィエ）が厳密に一对一対応していることが理想である。自然科学ではこれが実現されており、例えば元素記号なら、Hは水素、Nは窒素、Oは酸素と決められている。言語学の分野では、もっとも自然科学寄りの音声学が一番その様相を呈している。例えば、調音点について「両唇音」と言えば上下両方の唇で閉鎖あるいは狭めを作り調音される音であり、「軟口蓋音」と言えば、それが軟口蓋と舌背で作られて調音されるものであり、それ以外の意味はありえない。

ところが、音声を離れると、言語学の術語は途端に細心の注意を要するものとなる。同じ術語が対象言語によって、さらに研究者・文法書著者によって、異なる構造を指す場合が少なくない。

例えば、「受動態 (passive voice)」と呼ばれる現象が多くの言語で見られる。この名称で呼ばれる言語構造は、実に多様である。例えば、日本語のいわゆる「迷惑受け身」の「雨に降られる」「夫に死なれた」は、他動詞ではなく自動詞から派生されている点で、典型的な受動態とは大きく異なる。そうすると、ここで注意すべき点かふたつある。ひとつは、文法書の読み手として、その記述で「受動態」と呼んでいるものが、どのような構造をなしているのか、典型的なものなのか、あるいは何か変わったところがあるのか、注意しなくてはいけない。「これは受動態です」というだけの説明を鵜呑みにしてはいけない。

もうひとつは、逆に文法書の書き手の立場として、記述しようとしている形式が、受動態と呼べるものかどうか、受動態と呼ぶとすれば、まず、そこで言う「受動態」の定義はどういうものか、そしてその形式がその定義に合致しているのかいないのか、定義から逸脱する点はないのかなどを説明しなくてはならない。

一例を筆者が調査しているスライアモン語からあげる。問題とするのは(1a)であり、これが受動態と呼べるかどうかである。対応する他動詞文は(1b)である³。

- (1) a. ?aq'-a-t-anapi-m
 chase-LV-CTR-2PL.OBJ-PASS
 'You (pl.) were chased.'
- b. ?aq'-a-t-anapi-s
 chase-LV-CTR-2PL.OBJ-3ERG
 'He chased you (pl).'

(1a, b) いずれにも同じ形式の2人称複数目的語の接尾辞 *-anapi* が使われている。つまり、(1a)でも被動者の標示は目的語のままである。(ちなみに、2人称複数主語は目的語接尾辞とは異なる形式で、クリティック *čap*, あるいは接尾辞 *-ap* で表される。) この点だけを考えると、他動詞文と比べて被動者の昇格がなく、典型的な受動態とは言えない。しかし、筆者は Watanabe (2003: 283-285) において、これは受動態と呼べる十分な根拠があると論じた。ここで詳述はしな

³ 記号・略号は次の通り：_ = clitic boundary, ~ = reduplication boundary, 2 = second person, 3 = third person, CTR = control transitive, DET = determiner, ERG = ergative, IMPF = imperfective, LV = link vowel, OBJ = object, OBL = oblique, PASS = passive, PL = plural.

いが、具体的には、(1a, b)に見るように、能動態と規則的な交替があること、対応する他動詞の動作者が降格されること、他動詞と比べて動詞結合価が減り1項動詞（すなわち自動詞）になっている点である。ちなみに(1a)では動作者が表されていないが、それを明示する場合は、次の(2)に見るように、斜格の名詞項にする必要がある⁴。

- (2) ?aɣ¹-a-t-θ-əm ?ə̌ ɣawgas
 chase-LV-CTR-3OBJ-PASS OBL₁ grizzly.bear
 ‘He was chased by Grizzly.’

同様の術語の問題は、「語」、「語幹」、「語根」、「付属語」、「文」、「品詞」などなどと枚挙に暇がなく、言語のほぼ全般に渡る。言語がいかに多様かを物語っているが、それだけ注意して読み、書かねばならない。参照文法書ではこのような基本的な概念についても、明確に説明されていないといけない。

ある術語が一般的に意味する現象から逸脱する場合、その個別言語の現象に合う特殊な術語を作ってしまった方が誤解がないと思われる場合もある。しかし、いたずらに術語を増やしても、それは読み手の負担を増すことになるので注意が必要である。

耳慣れない術語の使用も問題である。一般的とは思われない術語の例として、セイリッシュ語族の文法書から以下のようなものがあげられる。いずれも、オランダの言語学者 Aert Kuipers とその教え子たちによる文法書に現れる。(以下、Kuipers (1967) はスクワミッシュ語、Nater (1984) はベラ・クーラ語、van Eijk (1997) はリレット語のいずれも極めて質の高い参照文法書である。)

- ‘verba sentiendi et declarandi’ (Kuipers 1967: 192–193, Nater 1984: 103–104, van Eijk 1997: 110)
 verba sentiendi は「知覚動詞 (perception verbs)」, verba declarandi は「告知動詞 (verbs of saying)」
- ‘svarabhakti vowel’
 “In a few words of the shape /CVR(?)C/ variants with a **svarabhakti**-vowel between /R/ and /C/ and without glottalization were recorded. [...]” (Kuipers 1967: 41 強調-渡辺)
 これは「挿入母音」のことを指し、サンスクリットの特に *l* あるいは *r* と、後続子音の間に挿入される母音のことを言う。
- ‘bahuvrīhi’
 “The prefix /nəx°-/ occurs with a number of stems containing somatic suffixes to form **bahuvrīhi** complexes ‘sad-faced’, ‘bald-headed’, etc. Before consonants proper the alternant /n-/ appears: /nəx°-(h)i-a¹iūs/ ‘big-eyed’ (cf. /hii¹, hi-/ ‘big’, suff. /-a¹iūs/ ‘eye’), [...]” (Kuipers 1967: 114–115 強調-渡辺)
 ‘bahuvrīhi’ はサンスクリット学における「外心的複合語」を指し、特に指示対象を持つ性質を特定することによってその対象を指すものを意味する。例えば、英語で言えば ‘much rice’ が「裕福な者」を意味する (Scalise and Bisetto 2009)⁵。

⁴ スライアモン語の名詞項は、無標で現れる正格か、斜格標識が前に付く斜格の2種類である。正格名詞項は自動詞主語と他動詞目的語を表し、それ以外は斜格で表される。他動詞主語が名詞項で表されることは極めて稀で、表される場合は受動態の斜格として表されることが多い。

⁵ しかし、Scalise and Bisetto (2009) はこの術語を、複合語に関する術語の中で、問題があるものの筆頭にあげている：“(a) Terminology is often associated with a single language and thus not valid from an interlinguistic point of view” [...] “Problems

これらの用語のうち、‘*verba sentiendi et declarandi*’はラテン語で、他の文献でも見ることがないわけではないが、その他ふたつは他の参照文法書で見るとはまずないと思われる。現在なら各種術語辞典も多く、あるいはインターネット上で検索すればこれらの用語が出てくる。Wikipediaにも記述がある。しかし、読み手の負担になるような術語をわざわざ使わなくてもよいであろう⁶。

2.6. 例

ある文法現象や構造を説明するためには、当然ながら例が不可欠である。(日本語では、「例文」と呼ぶことが多いが、これは厳密には「文」を例示するものであるが、それよりも小さい句や節の例を指すこともある。それよりもさらに小さい単位、例えば、語や音節・モーラなどもあるので、本稿では「例」と呼ぶ。)文法書であげる例については、Weber (2006) や Mithun (2014) が詳細に論じている。

例は、文法の説明と同等に重要であると考えられる。参照文法書の中で、構成(章立て)が骨だすると、説明する本文は血管と神経、例が肉だと言えるかもしれない。あるいは例は、本文(説明の文)よりもさらに重要と言えるかもしれない。というのは、本文での分析の説明が妥当なものであるかどうかは、例によって支持されるものであるし、分析に過ちがあったり、読み手が同意できないものであったとしても、それは信頼できる例があってこそ読み手が判断できるものである。さらに、例は読み手が二次的に利用できる価値の高い資料となりうる。特に研究が進んでいない言語や、危機言語の例は、「記録」の意味もあり、その分析に使われた理論的枠組みが古くなったとしても、例だけは将来に渡り貴重なデータとなることがある。

どのような例を選択してあげるかは、読み手のことを念頭に、理解しやすくする工夫が必要である。まず、本文の説明と、その言語現象を示す例は連動していなければいけない。すなわち、その例が何についての例なのか、あるいはその例のどの部分が問題としている部分なのか、本文で説明していることの例示なのか分かるようになっていくべきである。読み手がその例を分析や解釈しなくてはならないのでは混乱と誤解のもとになってしまう。

そして、当該参照文法書の中で、その例が出てくるまでの説明で理解できる例をあげるのが理想である。すなわち、その箇所よりもさらに後ろの情報がないと理解できないものは避けるべきである。ただし、これも実際は簡単なことではない。すでに述べてきたが、言語は異なる部分が互いに関係し支え合う。そのため、ある言語現象AとBについて説明をする際に、AについてはBを前提に説明しなくてはならないにも関わらず、Bについては、Aを前提にしなくてはならないという、まさに鶏と卵の関係にあるものばかりである。参照文法書の著者の力量がはかられるところである。

デジタル環境が進化するにしたがい、例の元データ、特に音声データをデジタルファイルとし

identified under (a) can be exemplified by the term *bahuvrīhi*. This Sanskrit word, meaning (*having*) *much rice* (cf. Whitney 1889: 502), has been used for identifying nominal compounds with possessive interpretation but ended up by indicating exocentric compounds *tout court*. As shown by Bauer (2001b: 700), the term *bahuvrīhi* was finally applied ‘to any compound which is not a hyponym of its own head element’. The use of the term *bahuvrīhi* as a generic label for exocentric compounds is thus an incorrect extension; *bahuvrīhi* in fact refers to a specific subclass of exocentric compounds, i.e. possessive compounds.” (Scalise and Bisetto 2009: 35-36)

⁶ 筆者がセイリッシュ語族の勉強を始めた1990年に最初に読んだのが Kuipers (1967) と Nater (1984) であり、言語学の術語集はごく限られていた。もちろんインターネットは存在せず、聞いたこともないこれらの用語が調べてもなかなか見つけれなかった。

て論文や書籍に付けて配布することが可能になった。データの容量が大きいものも、インターネット上に置いたデータファイルへアクセスできるようにすることで対応できるようになってきた。元のデータにアクセスできると、参照文法書や論文のデータの信憑性が保証され、第三者(読み手)によってさまざまな角度から検証することが可能になる。元のデータをアーカイブに入れ、読み手がそこにアクセスできるようにする形式は、今後さらに進むと思われる。この検証可能性の重要性については、Berez-Kroeker et al. (2018), Gawne and Berez-Kroeker (2018) などが詳しい。

2.6.1. 量・多様性

例の数については、簡単に言えば、「多からず少なからず」が理想であるが、ひとつの言語現象や構造を示すために、実際どのような例をいくつあげるかは熟考が必要である。紙幅の都合があり、物理的なスペースの制約のために多くはあげられない場合もある。文法全体を書いたものでも、「概説・スケッチ」の場合は、自ずと少数の例に限られるであろう。その一方で、参照文法書は紙幅の制約が緩いはずである。

まず、筆者がさまざまな文法書を調べていて気がついたのは、その言語の基礎的な言語現象・構造、すなわち無標・デフォルトのものについて、例が極端に少ないことがあった。これはその言語の専門家である著者にとっては、当たり前すぎて、意識がむしろ例外的な現象へ向いているためではないかと思われる。

例が少ないものの中には、一例しかあげていない場合もあり、それでは説得力と信ぴょう性に欠ける⁷。

逆に、例がいたずらに多いのも意味をなさない。参照文法書は語彙集や例文集ではない。(もちろんそれらを含むことはありうる。) 例えば、ある言語の「飛ぶ」という動詞の例文で、「鷹が飛ぶ」、「鳩が飛ぶ」、「すずめが飛ぶ」、「ツバメが飛ぶ」といくつも並んでいても、ただ名詞項が違うだけならば、それを10や20出す意味はなく、2,3あれば十分であろう。

例文は、そこに現れる人称やTAMなどに関して多様性があるのが望ましい。例えば、1人称が主語の例のみ提示されていると、3人称も同じなのかという疑問が生じる。主語が1・2人称か3人称かで、格標示が異なる言語が少なくないためである。さらに、3人称の場合は有生物、無生物、一般名詞、固有名詞、人名などで何らかの扱いが異なることがある。このような点も例の多様性に含めるべきである。

2.6.2. グロス

例には、各語に対応する「グロス」を(通常は原文の下、2行目に)付すべきである。ひとつの語が複数の形態素から形成されている場合は、形態素境界をハイフンなどで明示し、グロスは原則的にひとつひとつの形態素に振る。形態素が文法的機能を持つものであれば、分かりやすい略号を使い、英語ならば大文字、あるいはスモール・キャピタル(small capital)(小型英大文字)で表記し、語彙的なものと判別しやすくするのが慣例である。例えば、次はスライアモン語(Sliammon, セイリッシュ語族)からの例である。

⁷ あえて書誌情報はあげないが、筆者が専門とする語族に関する大部な論文に、分析の主張を支える肝となる例がひとつしかないものがあった。しかもその例の分析が間違っており、その主張を支えないものであったことがある。これも、同様の例を複数あげるということを徹底していれば回避できた問題ではないかと思う。

- (3) ?a~?aq'-a-t-as tə tumiš
 IMPF~chase-LV-CTR-3ERG DET man
 'He is chasing the man.'

適切で分かりやすく、一貫したグロスは必須である。グロスがないと非常に分かりにくい、あるいはまったく分からない。例えば、次の抜粋は *Chamorro Reference Grammar* (Topping 1973: 77) の形態論を扱った章の最初の例文であり、品詞分類の説明について例示をしているものである。

Consider, for example, the word *dánkolo* 'big' in the following sentences:

Dánkolo si Juan
 'Juan is big.'

Hu li'e' i dánkolo
 'I saw the big one.'

Hu li'e' i dánkolo na taotao.
 'I saw the big person.'

Topping (1973: 77)

ここではグロスが付されておらず、本文に各語形の意味機能が説明してあるわけでもない。ここから読者が何をどう読み取ることを期待して、このような記述になったのか理解に苦しむ。確かに、ゆっくり考えれば、*dánkolo* が 'big' を意味するのであろうことは分かる。しかし、そもそも読み手にそのような負担をかけるべきではないし、読み手に分析をさせるべきではない。それは著者が意図していない誤読を引き起こすことになるからである。ちなみに、同書のシリーズとして同じく University of Hawai'i Press からいくつか文法書が出ているが、例文提示についてはどれも同じスタイルである。この文法書シリーズには対応する辞書も刊行されており、チャモロ語では Topping et al. (1980) がそれにあたる。ただし、文法書の方にはこの辞書があることが明記されていないため、すでにその存在を知らない読者には分からない。辞書があり、文法書を読む際にはそれを参照するように書いてあったとしても、掲載された論文を理解するために一語ずつ辞書で引かなければならないのは、読み手には大きな負担である。

もちろんグロスを付けることが、それほど簡単ではないことも少なくない。形態素と意味機能がきれいに一対一対応している場合は良いが、言語はそれほど単純にはできていない。特に同じ形態素に複数の意味機能がある場合、それが現れる例によってグロスを変え、そこで一番合う意味機能をグロスとすることも考えられる。例えば、次のスライアモン語の例に見る *-ut* という接辞がある。これは動詞的な語幹に付き、過去を表すが、名詞的な語、例えば親族名称など人間を表す語に付き「亡くなった、故」、あるいは「前の、別れた、元（その関係だった）」を意味し、普通名詞に付き「失くした」を意味する。

- (4) *k'wəq^w-ut*⁸ 「(木など) 割れた」 (*k'wəq* 「(木など) 割れる」)

- (5) *man'-ut*⁹ 「亡くなった父」 (*man* 「父」)

⁸ *q* から *q^w* への変化は後続の母音 *u* の円唇性の同化による規則的な変化。

⁹ *n* から *n'* への変化は後続の接尾辞初頭の声門閉鎖音によって引き起こされる規則的な変化。

(6) *gaqaθ-ut* 「前夫」(*gaqaθ* 「夫」)

(7) *k'wut'a-h-ut*¹⁰ 「失くしたスティック」(*k'wut'a* 「スティック¹¹」)

この接尾辞に対してそれぞれの例で、「過去，故，前，紛失」などという異なるグロスを振る方が、その語全体が表す意味に合致して分かりやすいかもしれない。しかし、グロスが異なると、読み手としてはそれは異なる形態素だと取るのが自然であろう。それはいくら本文で、これが同一形態素であると説明を書きおいても、誤解を招きやすいので避けるべきである。

どのようにグロスを振ることにしても、読み手が誤解せず、すぐに理解できる原則を立てて、それを一貫して適応すべきである。グロスは読み手が例を理解する手助けになるべきものであり、読み手にグロスの「解説」を強いることになっては本末転倒である。

同じ形態素でも、機能が多岐に渡り、そのグロスをひとつに限って一貫して付すと、例文によってはかえって分かりにくくなる場合も考えられる。パラウク・ワ語の記述文法書である山田(2020)は、それを避け、同一形態素に複数種のグロスを振った例である。同書では、冒頭に文法機能を持つ形態素の一覧をあげ、どのようなグロスを付すかを示している。そこで例えば、*kah*は「場所，方向，手段，原因，補標」のいずれかのグロスが振られるが、同一の形態素であることが分かるようになっている(山田 2020: xvii-xviii)。

どのようにグロスを振るかは、分析の結果を反映しているものであるし、可読性を上げることにつながる。「魂は細部に宿る」と言うが、参照文法書の場合、それはグロスなのではないかと思われる。

2.7. 説明・分析の正当性・根拠

学習用の語学文法書と、参照文法書の大きな違いは、前者が規範的であるのに対し、後者は記述的であり、分析の根拠を説明していることにある。すなわち、参照文法書ではある言語事象を何故そのように分析するのか、根拠とともに明確な説明をしているべきである。

例えば、ふたつの形態が形式的に同じ場合、それらはひとつの形態素の異形態なのか、ひとつの形態素だがかなり異なるふたつ(以上)の意味機能を持つものなのか、あるいはふたつの異なる形態素なのかの問題となることがある。著者がどちらの分析を取るにせよ、それは根拠を示して説明をしなくてはならない。それは容易ではなく、分析者である著者も正解、あるいはより妥当な分析が何か、迷うこともある。そのような時は、下手にごまかさず、何故ここではこのような分析をして記述をするのか、他の分析の可能性はどういうものがあるのか、どこが分からず未解決なのかなどを正直に書いておくべきである。

説明がトートロジーになっていないことも重要である。言語は内部で互いに支え合い、関係し、連動する体系なので、説明もトートロジーになりやすいことに常に注意しなくてはならない。例えば、「動詞(語幹)」と「動詞接尾辞」について、前者については、「動詞接尾辞が付くもの」とし、後者は「動詞(語幹)に付く接尾辞」としたのではトートロジーで説明になっていない。

2.8. 類型論・通言語的観点

参照文法書の執筆と類型論や通言語的観点は一見それほど直接的な関係はないように思われる。逆に、参照文法書では、対象とする言語のデータのみから内的な分析をおこない、その理法

¹⁰ *-h-*は母音終わりの語幹にこの接尾辞が後続する際に現れる挿入子音。

¹¹ 鮭のひらきを挟んで焚き火のまわりの地面に刺して焼く時に使う棒のこのみを指す。

を解き明かして記述すべきであり、他の言語の情報を使うべきではない。

しかし、著者に、類型論的・通言語的観点があるかないかで、非専門家の読み手にとっての、その文法書の分かりやすさやおもしろさが変わってくると考えられる。

著者が、当該言語とは異なる系統関係の言語や、特に類型的タイプが異なる言語を多く知っていると、当該言語のどのような点が特徴的なのかが分かり、文法書も、それを踏まえて、特徴的な点についてより多くのページを割いたり、より多くの例をあげることにつながるであろう。著者にそのような知識がないと、多くの言語に見られる現象を「珍しい、おもしろい」と説明したり、逆に本当に珍しい現象について簡単に触れる程度の浅い記述で終えてしまっている場合がある。

例えば、ある言語の格の標示が能格・絶対格型だとする。そうすると、このタイプの言語は類型論的に、逆受動構文を持つことが多い。このような類型論的知識が筆者にあれば、逆受動構文があるかないかは、必ず調べるものであろうし、その参照文法書の中で必ず触れるべきものであろう。そのような知識のある読者は、能格・絶対格型言語だと見た瞬間に、逆受動があるのだらうと予期して読み進めるはずである。

この他にも、筆者がよく気になるものが「部分重複」という用語である。オーストロネシア語族の言語の記述でよく使われている。例えば、タガログ語で、*lakad*「歩行」から形成された *la-lakad*「歩く」は「部分重複」、*araw*「日、太陽」から作られた *araw-araw*「毎日」は「完全重複」と呼ばれている(山田 1989: 579)。しかし、世界の言語の中には重複を形態的手法として生産的に使う言語は多く、語幹のどの部分を重複するかについては多種多様であり、その点、「部分重複」という用語はそれだけでは明確ではない。これはもちろん、§2.5ですでに述べた、術語を明確に定義して使わなければいけないという点にもつながる。例えば、スライアモン語から例をあげると、語幹の $C_1V_1C_2\dots$ に施されうる重複法には、 $C_1V_1\sim$ 、 $C_1V_1C_2\sim$ 、 $\sim VC_2$ などがある(Watanabe 2003: 371–406)。これらのいずれも「部分重複」と呼べるものである¹²。

このように、類型論的・通言語的な観点や知識をも備えた著者による参照文法書は、対象の言語の特徴をよりよく捉え、記述している可能性が高い。ただし、間違っただけいけないのは、類型論的・通言語的な情報を当該言語の分析や説明の根拠にしていけないということである。あくまでその言語の内だけで記述が積み上げられていなければいけない。

その他、当該言語の記述に関係ない他の言語の情報を入れるべきではない。Hagège (1981) はスライアモン語の文法書であるが、時々、「この音はウビフ語のそれに似ている」とか「これはマヤ語族によく見られる」などという指摘が挿入されている。Kroeber (1989: 115) による同書の批評にもあるように、これらはスライアモン語の記述にまったく関係がないし、読み手が同言語を理解するために何ら役に立たない。良い参照文法書では、著者の類型論的・通言語的な知識が行間に感じられることがある。しかし参照文法書は、そのような知識を本文に書いてひけらかす場ではない。

¹² ただし、語幹が $C_1V_1C_2$ の場合には $C_1V_1C_2\sim$ を「完全重複」と呼べるが、この重複法も $C_1V_1C_2$ よりも長い語幹にも施しうる。

3. おわりに

以上、本稿では限られた側面ではあるが、理想の参照文法書とはどういうものか、それに近づくには何が必要かを考察した。網羅的でありながら可読性を高くするなど、時に矛盾するような要求を満たさなければならないし、何より一言語の全体を扱わなければならないというのは、執筆者にさまざまな知識を要求する。

冒頭に言及した「シリーズ記述文法」(くろしお出版)の「シリーズ刊行にあたって」には、以下の一節がある(下地 2018: ii)。

言語資料を分析する道具、すなわち言語学の方法論も進化を続けている。調査研究が不十分であった多くの言語について研究が進むにつれ、それまで知られていなかった言語現象が見つかることがある。すると逆に、これまで研究されてきた言語でも、同様の現象があったのに、研究者がそれを念頭に調査していなかったために、その言語にはそれがないと思っただけという可能性が出てくる。研究の進化が、新しい疑問・質問を生み出すのである。すなわち、文法記述の営みには終わりが無い。

最後に、理想の参照文法書を書くための著者に必要な資質は何か考えてみると、言語学のほぼ全般に渡る広範なそして深い理解が必要であり、かつ、対象の言語だけではなく、なるべく多くの、それも典型的に異なる言語に関する知識が必要であろう。そこまでは著者となる研究者のためゆめ努力しかないが、さらに本稿で考察してきたこと、例えば、術語はどのようなものが分かりやすいか、どういうものについては説明が必要か、例はいくつくらい、どのようなものをあげれば読み手にとって多すぎず、少なすぎないであろうか、鋭敏な感覚・センスが求められる。その感覚を磨く唯一の方法は、さまざまなタイプの言語の参照文法書になるべく多く触れることではないかと思われる。

“If you want to be a writer, you must do two things above all others: read a lot and write a lot. There’s no way around these two things that I’m aware of, no shortcut.”

— Stephen King, *On Writing*¹³

謝辞

本研究はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」(2016–2017年度)の成果の一部である。

参考文献

Aikhenvald, Alexandra Y. 2015. *The Art of Grammar—A Practical Guide—*. Oxford: Oxford University Press.

¹³ 大ベストセラーを連発するアメリカのミステリー小説作家スティーブン・キングが小説を書くことについて書いた本。

- Ameka, Felix K., Alan Charles Dench, and Nicholas Evans, eds. 2006. *Catching Language: The Standing Challenge of Grammar Writing*. (Trends in Linguistics, Studies and Monographs, Vol. 167.) Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Berez-Kroeker, Andrea L., Lauren Gawne, Susan Smythe Kung, Barbara F. Kelly, Tyler Heston, Gary Holton, Peter Pulsifer, David I. Beaver, Shobhana Chelliah, Stanley Dubinsky, Richard P. Meier, Nick Thieberger, Keren Rice, and Anthony C. Woodbury. 2018. "Reproducible Research in Linguistics: A Position Statement on Data Citation and Attribution in Our Field." *Linguistics*, 56-1: 1–18. DOI: <http://dx.doi.org/10.1515/ling-2017-0032>.
- Davis, John H. 1970. "Some Phonological Rules in Mainland Comox." Master's thesis, University of Victoria.
- Dixon, R. M. W. 1994. *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- エヴァンズ, ニコラス 2009 「記述されていない言語の文法を書くには」『地球研記述言語学論集』第1巻: 1–34. (稲垣和也訳.)
- Evans, Nicholas and Alan Dench. 2006. "Introduction: Catching Language." *Catching Language: The Standing Challenge of Grammar Writing*. (Felix K. Ameka, Alan Charles Dench, and Nicholas Evans, eds), 1–39, Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Gawne, Lauren and Andrea L. Berez-Kroeker. 2018. "Reflections on Reproducible Research." *Language Documentation & Conservation Special Publication No. 15: Reflections on Language Documentation 20 Years after Himmelmann 1998*, 22–32. URL: <http://hdl.handle.net/10125/24805>.
- Hagège, Claude. 1981. *Le comox lhaamen de Colombie britannique: présentation d'une langue amérindienne*. (Amerindia: Numero Spécial 2.) Paris: Amerindia.
- 林範彦 2016 「書評: Alexandra Y. Aikhenvald, The art of grammar—A practical guide—, Oxford: Oxford University Press, 2015.」『言語記述論集』第8巻: 253–272.
- Kroeber, Paul D. 1989. "Review of *Le comox lhaamen de Colombie britannique: présentation d'une langue amérindienne* by Claude Hagège," *International Journal of American Linguistics*, 55, No. 1: 106–116. DOI: <https://doi.org/10.1086/466109>.
- Kuipers, Aert H. 1967. *The Squamish Language: Grammar, Texts, Dictionary*. (Janua Linguarum, Series Practica Vol. 73.) The Hague and Paris: Mouton.
- Mithun, Marianne. 2014. "The Data and the Examples: Comprehensiveness, Accuracy, and Sensitivity." *The Art and Practice of Grammar Writing*. (Toshihide Nakayama and Keren Rice, eds.), 25–52, Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Nakayama, Toshihide and Keren Rice, eds. 2014. *The Art and Practice of Grammar Writing*. (Language Documentation & Conservation Special Publication No. 8.) Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Nater, Hank F. 1984. *The Bella Coola Language*. (Paper / National Museums of Canada, National Museum of Man, Canadian Ethnology Service, Vol. 92.) Ottawa: National Museums of Canada.
- Newman, Paul. 2000. *The Hausa Language: An Encyclopedic Reference Grammar*. New Haven: Yale University Press.
- Scalise, Sergio and Antonietta Bisetto. 2009. "The Classification of Compounds." *The Oxford Handbook of Compounding*. (Rochelle Lieber and Pavol Štekauer, eds.), 34–53, Oxford/New York: Oxford University Press.
- 下地理則 2018 『南琉球宮古語伊良部島方言』(シリーズ記述文法 第1巻) 東京: くろしお出版.
- 下地理則 2021 「グラマーライティング—方言の記述文法を書くためのガイド—」『日本語文法』第21巻第2号: 136–152.
- Suttles, Wayne. 2004. *Musqueam Reference Grammar*. Vancouver: University of British Columbia Press.
- Thomason, Sarah. 1994. "The Editor's Department." *Language*, 70, No. 2: 409–423.
- Topping, Donald M. 1973. *Chamorro Reference Grammar*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Topping, Donald M., Pedro M. Ogo, and Bernadita C. Dungca. 1980. *Chamorro-English Dictionary*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- van Eijk, Jan P. 1997. *The Lillooet Language: Phonology, Morphology, Syntax*. Vancouver: University of British Columbia Press.
- Watanabe, Honoré. 2003. *A Morphological Description of Siammon, Mainland Comox Salish, with a Sketch of Syntax*. (Endangered Languages of the Pacific Rim Publication Series, A2-040.) Suita (Osaka): Osaka Gakuin University.
- Weber, David J. 2006. "The Linguistic Example." *Studies in Language*, 30, No. 2: 445–460. DOI: <https://doi.org/10.1075/sl.30.2.12web>.
- 山田敦士 2020 『バラウク・ワ語』(シリーズ記述文法 第2巻) 東京: くろしお出版.
- 山田幸宏 1989 「タガログ語」 亀井孝, 河野六郎, 千野栄一(編)『言語学大辞典』第2巻, 578–591, 東京: 三省堂.